



戌年！2018

「新しいところへ行こうよ。」開館と同時に入って来た子どもたちが向かったのは、絵本コーナーもある多目的室。この冬休みも一人で、友達同士で、家族と一緒に本に触れているたくさんの子どもの姿がありました。カウンターでは、次々に本を借りたり返したりしていきます。

読みたい本が貸出中だとわかると「予約します。」と自分で予約票に記入して、持ってくる子どもも少なくありません。元気な子も、はにかみやさんも。もうすっかり常連さんです。

❁いぬ・いろいろ

今年の干支「戌」にちなんで、図書館の書架で見つけた犬たちをいくつか紹介します。

○スタイリッシュなドーベルマン、気高く人なつこいセントバーナード、ライオンのような風貌のチャウチャウなど80種を超える犬種それぞれの外見や性格を、美しい写真と共に紹介している『世界で一番美しい犬の図鑑』タムシン・ピッケラル著//アストリッド・ハリソン写真//エクスナレッジ。ちなみに『猫の図鑑』もあります。

○誰からも愛される犬、臆病な犬などその家で歴代飼われてきた犬たちが語り手となり、戦前から平成までの家族の歴史と、その犬の一生を描いた小説『十三匹の犬』加藤幸子著//新潮社。聖徳太子の愛犬雪丸、南総里見八犬伝の八房、小樽の消防犬ぶん、盲導犬サーブ、そして渋谷のハチ…。

○全国各地の忠犬・愛犬の像約60体を紹介する『全国の犬像をめぐる忠犬物語45話』青柳健二著//青弓社。

○今年には明治維新から150年でもあります。犬はポチ、猫はタマ。いつからこう呼ばれるようになったのか？幕末から明治にかけて、さまざまな出来事の中に登場した犬たちの姿を描いた『犬たちの明治維新ポチの誕生』仁科邦男著//草思社。

○海外の作品では、1962年にノーベル文学賞を受賞したアメリカの作家ジョン・スタインベックが、愛犬チャーリー（大きなプードル犬）とアメリカ一周の旅に出た日々を綴った『チャーリーとの旅・アメリカを求めて』ジョン・スタインベック著//サンマイル出版会。

○「ダーシェンカ」と名付けたフォックステリアの子犬の成長を寓話風に描いた『ダーシェンカ』カレル・チャペック著//新潮社（花矢図書館蔵）など。犬は古くから人間の生活になじみ、愛されてきたことがうかがえます。

❀待っています！

読みたい本がない！という人も、本は自分で買う！というあなたも図書館に来てみませんか？

待ち合わせの場所にしたり、夏は涼みに冬は暖をとりに、ラウンジでは飲食もできます。開館時間内なら何時間居てもすぐ帰っても、本は借りても借りなくてもかまいません。

書架を眺めていると知らなかった本に出会えたり、一冊の本が人生を変える！そんな大きなことはなくても、ささやかな発見があったり、幼いころワクワクしながらページをめくった懐かしい本に再会できるのも図書館ならではの。

本だけではなくありません。必要なところだけ見たい地図・辞書・事典・雑誌のバックナンバー・過去の新聞も、図書館ならあります。

もちろん立ち読みも大歓迎です。（栗盛・さ）